



曠野

信濃何九撰釋

序文の内いといふのいといふすなる心のちの
ありの好きいふまことわて

愚考源氏よあつていふる好きいものまけ
るよのありるるたうの世よあそありまじ自
然よあつたあつたの美言あり

芭蕉決日翁云ま人の長々かうて同一位の
るをよりとれりるあつたまをまよりと
れりる白をよとるうらみよりめとせりよ
白よりうへ上果の白ま心のこのあ故よ

あつた

よりめと持へし津く浦くを境波濤のこ
きり夢ひあはめて白くをえりてうとて
いうて集とりよけむ我後見の集る我家の俣
俣の一作の俣よりて我心よ應をさるる白
まのまら曠世集よ貞室宗因等の白まの
まらるる我家の俣俣の俣るるまの形けり
しきる俣俣の俣言るる故よ文盲愚昧れ
のまら口るまて自己よ俣俣を知らり
おりよりの多く出来作り心元俗の今日あ
まら物とりまらくいとて他の人を推し
むらよあつた我家の俣俣を説むをめ
りよころをさるるまら事なりと曲翠よ
俣のりよるると云く或書よ翁の曰我俣俣の
まらまらるるを知りまらまらとまら

ありしと愚老れりらく能 雀舌の人此りし不
て能き有りきとてこやても能く有りしめり
甚しむ言るる初心として他の有を批判
すりも又斥えらるる業の事こそまづ人の力
よよりておのつらるるおなりぬり 既にお家
鑑の有を荆口と許さる見えそこるひ世世
の附らるるを注の初届さる 去来り鹿山
の附らるるを解しそてるひ支考や杖を杖
の有りしと思ひぬるひ支考も扇引さく
及んさりの惠子よりあつひや上是の事さく
れぬしよして後世の今よりおれりてんや
是るるしとてり花の吉野山

愚考依川田喜六の峯の 白雲をいひし
るり此の古今の名吟より世の人口より
て何れ故よ名吟よりやと同一時よ是の
妙有りありて根えをえぬ 是るるを
今更支考の書りりのお祖翁をいひし
る貞室の是るるしよして有り杖又更
そりて有りき時よりこの柳下惠の語あり
し似たりし彼名不しよ支考の語あり
わりの出で支考より軍書よりあり 吉野山
此支考よりいしは 一白れお各りして是
しるる五文字のみ廢りりありし之柳は
山より黄金地より愛ゆしよ金峯山と名
の清嶽と云 震旦より花來りしよ
峯とも云は山より障有林障といふ山と障と

列て飛來り鏡之扱社清見系天皇御製衣
よりのをよりとありてよとつひくありのよ
く見えよき人よきみ世心あり人よ此御製衣
のこほきして白きほくらるるまき世心あり人
よりより見えむとのみ心けりて尚あり御製衣
を世見え花をよき見たりとありてよや世をよ
士調りか白よ花をよき見たりとありてよ
よりよりありて二日ぬよ世世をよき見たりとあり
されん世水なるよよ世世をよき見たりとあり
ありといよ美系より一の山を大雲よ降りてよ
てよよの山を御製衣とありてよよ記すぬのあり
皆彼御製衣よよありてよ一毎々貞室の名
白れ沃ち世世見えむとす世と世見えむとあり
花をよき見えむとすれんよ一の山を大雲よ降りてよ

の中よ花とありの山を一口よのひきて花の
よりよよ世世山よりひきて世をよき見たりとあり
晒着をよき見たりとありてよ世世の各々ありと
流石の祖爺世云よりてありてありてよ
く貞室の服よよ入あり祖師の大量のよ
申ししおありて西行よ人の汝越よありてよ
きよありてよ世世ありてよ

何よりそ花見えん人の 世 刀
楠花曰道元禪師の袂よみ形とありてよ
袈裟袋猫の皮花のさりりよ大左刀の鞘
世下の白をえたりとあり

峯の雲 ありて花よりありて
古連曰堀川百首よ色よりてよ誠の雲やあり
ありてありてよ橋の口方の山の端

下しの中の花といふ事心花の花

寂寂曰左傳曰師一宿為舍再宿為信過信為
次是を信一一夜泊るを上の客二夜泊るを
中の客三夜泊るを下の客とす下しの中
と阿婆ハ花の七白を流りて心の心を惜む心と
見よし一の華よ減ぬ花れ 滝

莫尔曰すくも寂然一き客の言一山わけ
はり電も禁るりのり古歌云然る一
ちり花も酒 盗 人よし

愚考万葉よとる伝きと梅のをふりけり
ちの并ての後ちりぬともよしその益も
ろよ花の歌のちりゆくも益をいふ事
さし酒盗人よとる心ちり一
ちりあひや初花よりのお忘れ

阿ら四

愚考るりのあひる信よゆきさるりといふ偷安
と書しや

檀の木の花入るらんぬすうし

愚考檀の木を曠世集の撰者あやう堂号
をいするり尾陽檀木堂主人と序よ書
あやうしや

目よるる紫山時を 初 蝶

愚考孟子子曰口之於味也目之於色也耳之
於声也鼻之於臭也又彩撰万葉よ綿く
曠野策師行目見山花耳聴言初よ五月
山卯花月夜時をきけともあひ又れ心
よも此のるる堂の三辰切の名白るり
よ世の人よあひぬ
云声不と初の中一や 杜宇

雨柳曰源三位於故一声もさゆりふ過して時を雲
ぬらんりふをささるりのゆく

杜鰲 十日の夜 舟多

舟地曰壬生忠見いほりいふゆきてゆくらぶ郭を
流のわたりをささるりの夜涼きに流を時をれま
物るまはるるり

阿ふ形一や今起て空をわくたす

愚考 金葉集さよふけて寐とあまのりまをさか
とさす人ほそふさそきく庵りのり

峠まわく祝抱つて月見 阿ふ

愚考 定家卿いさくらんをほほぬのわりて関
すまむまきくはう一を月の入るの侍もま叶ひ
るむや浪化解入云は炊をいさくらんを電をふ
ちるふふふと云白れ注し引て阿るを水

るのつ一既ふ祖翁の自画賛まもい表をふ
木履うけいして出立しとさるるふふの意
しして考ふ人さす一

名月 年よ十二を有るる

古連曰八月十五日ふ新す紀約言十二世中安勝
於此夕之ぬの意一や又続古今集天曆序製月
まらふふの月を連と今月のまらふの月ふ似る月
それ手

名月や海や舟りたるん 阿ふ

漁村曰初花集ふ林の夜の月ふ心のあくくれて
雲ふふ物を思ふふふのちぬの意ふ似る
朝つて夜はらぬふと見る月夜が

愚考 十三夜を中右記云保延元年九月十
三日今宵雲淨明之覽乎法皇明月を双之

中世後出と云く中世化の中津門右大臣卷
原史忠公の家説る事ハ醍醐天皇の時や
又曰建仁寺の三益和尚十三夜の訪の序文よ
此夜敬月より延喜の時と云く

暮いふ月の事ありし海の果

愚考朔日の月の事天文志曰月朔見東方曰
朏又謂之例匿るの意多し朏をうとといふ
ともいふもや月朏をうといふなりといふ

何る月の見えも似れ三日の月

敬祿曰白瑞日月の三日生明之名あり杜若月
月似磨鏡或を玉的響月初月若月等の名
を何と云ともそまらるる似れと云

夕月夜初燈げしてあけ見え

愚考新撰美草あふ夕三里夜と云てユツクユ

と訓すは月の月出で著方までよ三里の名を
歩初す一きの名よや夕月日終月日す一て月
をツクと訓すなりあるなり

雲北月や融成夏の敵の色

と角曰嶺々仇雠の強氏ありと是を一格意
として凡百番のうちよ目よ立初身ありき
雲よ起臥中略十とをありけりし流と云く
云や舟なるを舟うし江口の里りそ宗岡やこれ
と云はれ方いりなりと云てしを白を承りて
そ実を控ふる所朧皆よ入て皆れとも二つ
え舟つと初もなりりし朧よ天津よそふ雲い
出すとあり

いとゆかむ雲よとよあふよふまて

あふれよと云後よいさくらんと云しあひらりとこ

定家卿のいさくらもの歌を御此のよふ思す
きこもたれくらん

夜の雲ねとこぬやうよ枝ありむ

愚考古今集ふをりて見んハ落そをぬす枝萩
の枝もぬすよれり白萩とりよ秋の奪胎換骨
此法をもて仇あるは古歌流とる標別あり

二日よもぬりるをちし花の春

一書よ宵よりの友の才て酒興し梅も不ら酔て
はらまし一故終よ終舞して昼よめて夜より体そ
をぬすりそまき高閑樂のさるまて世よく
そとぬぬるりのやめてをき此一年の路の暎を
見たりしちりるよよしし二日とてもぬりり
をちし一暎をえんや一一日とてもよし花の春
よてまそあまると凝滞をさる心のふとを學す

一春字終よ云二日よもぬすしすしちりるをぬす
乎目るまよ二日よもぬすしすしとこ一書よ二日よ
てぬぬりるをちしるのよての守暗ことと云
愚考此てよんハ又二日よもぬすよて暎を見
らばまむのやしぬりるをちしと和を入れて守
るるり続猿蓑よ人の春よこくくくくくく
初稿此てよんと同じし意もて人の氣もくく初
ふういやしむすかとも他ハしと初稿よ執
愚のまをいひかこりるをちるる花の春
をぬすちりるよ柳もてよんハの運ひさるる

松さきの伊勢う家賞よ人を流
愚考伊勢の清々東洞院よ任て庭茶小結の
松ありそまこと意てよめり古今集よ飛る川
関よもあまぬ我家の流ふりりゆくおよそ宿る

秋々否 建 然 小 あり けり 一 膏

玄孫堂曰 玄孫法所 処 一 貝 といふ けり 形 之 類
来りて 連 秋 の 貝 一 あり けり 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ
從 階 然 小 あり けり 或 人 一 あり けり 是れ 是れ 是れ 是れ
以 我 意 之 松 浦 之 磯 の 一 貝 の 尻 一 あり けり 是れ 是れ
行 たり けり 一 愚 考 魚 肉 曰 膏 菜 蔬 曰 蕪
廣 身 曰 凡 非 穀 而 食 物 謂 之 蕪

あきり あり けり 一 年 あり 拍 あり 然

愚 考 史 記 曰 松 拍 為 百 丈 長 守 門 固 物 之 也
松 之 一 あり けり 度 年 の 膏 あり けり 是れ 是れ 是れ 是れ
拍 之 一 あり けり 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ
い づ 一 あり けり 一 在 子 曰 受 於 命 天 惟 松 拍
獨 也 在 冬 復 善 之 又 王 荆 公 字 說 曰 松
拍 為 群 木 長 故 松 從 公 猶 公 也 拍 從 白 猶

拍 あり 然

伯也 五 雜 俎 曰 松 拍 獨 以 春 抽 新 葉 既 長 而 後
葉 黃 為 又 曰 秦 皇 封 松 於 太 夫 又 曰 漢 武 帝
封 拍 於 大 將 軍 又 唐 武 后 封 拍 於 太 夫

一 元 節 也 拍 之 一 あり けり 一 愚 考

玄孫堂曰 或 物 説 一 云 海 の 一 あり けり 是れ 是れ 是れ 是れ
一 あり けり 拍 之 一 あり けり 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ
後 述 攝 之 一 あり けり 心 休 之 一 あり けり 一 愚 考 山 家
集 何 一 あり けり 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ
一 あり けり 之 一 あり けり 拍 之 一 あり けり 是れ 是れ 是れ 是れ
花 之 一 あり けり 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ
一 あり けり 拍 之 一 あり けり 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ 是れ
愚 考 白 氏 文 集 曰 忽 因 時 良 警 年 幾 四 十

如今^{カウ}欠^{カウ}一年^{カウ}比^{カウ}一^{カウ}年^{カウ}を二^{カウ}年^{カウ}よ^{カウ}元^{カウ}形^{カウ}一^{カウ}て^{カウ}白^{カウ}と
を^{カウ}を^{カウ}わ

伊勢浦や比本引体心多き此妻

味堂曰太神^{カウ}ま^{カウ}以^{カウ}造^{カウ}堂^{カウ}の材^{カウ}木^{カウ}紀^{カウ}列^{カウ}態^{カウ}世^{カウ}より^{カウ}考^{カウ}し

小^{カウ}棋^{カウ}子^{カウ}栗^{カウ}や^{カウ}ひ^{カウ}ろ^{カウ}く^{カウ}心^{カウ}松^{カウ}の^{カウ}門^{カウ}

愚^{カウ}考^{カウ}統^{カウ}日^{カウ}本^{カウ}記^{カウ}曰^{カウ}皇^{カウ}武^{カウ}天^{カウ}皇^{カウ}神^{カウ}龜^{カウ}二^{カウ}年^{カウ}播

直^{カウ}漢^{カウ}七^{カウ}より^{カウ}棋^{カウ}子^{カウ}の^{カウ}種^{カウ}を^{カウ}ち^{カウ}ぬ^{カウ}ゆ^{カウ}り^{カウ}伊^{カウ}勢^{カウ}お^{カウ}後

よ^{カウ}石^{カウ}の^{カウ}上^{カウ}よ^{カウ}ろ^{カウ}く^{カウ}一^{カウ}日^{カウ}く^{カウ}水^{カウ}を^{カウ}せ^{カウ}ら^{カウ}か^{カウ}り^{カウ}一

ら^{カウ}り^{カウ}の^{カウ}大^{カウ}と^{カウ}り^{カウ}て^{カウ}此^{カウ}初^{カウ}を^{カウ}摘^{カウ}む^{カウ}り

月^{カウ}花^{カウ}の^{カウ}ら^{カウ}一^{カウ}め^{カウ}る^{カウ}此^{カウ}麗^{カウ}の^{カウ}木^{カウ}く^{カウ}り^{カウ}か

一^{カウ}書^{カウ}よ^{カウ}月^{カウ}花^{カウ}の^{カウ}娘^{カウ}と^{カウ}り^{カウ}年^{カウ}の^{カウ}娘^{カウ}月^{カウ}の^{カウ}娘^{カウ}日^{カウ}れ^{カウ}娘^{カウ}を

比^{カウ}流^{カウ}よ^{カウ}し^{カウ}り^{カウ}こ^{カウ}此^{カウ}麗^{カウ}の^{カウ}木^{カウ}を^{カウ}え^{カウ}る^{カウ}ま^{カウ}は^{カウ}依^{カウ}り^{カウ}よ^{カウ}て^{カウ}ハ

月^{カウ}形^{カウ}花^{カウ}形^{カウ}と^{カウ}り^{カウ}よ^{カウ}り^{カウ}依^{カウ}り^{カウ}は^{カウ}く^{カウ}一^{カウ}日^{カウ}法^{カウ}ハ^{カウ}日^{カウ}季^{カウ}よ^{カウ}表^{カウ}す

さ^{カウ}か^{カウ}娘^{カウ}や^{カウ}よ^{カウ}い^{カウ}の^{カウ}面^{カウ}い^{カウ}り^{カウ}形^{カウ}く^{カウ}ら^{カウ}む

一^{カウ}書^{カウ}よ^{カウ}よ^{カウ}い^{カウ}の^{カウ}面^{カウ}を^{カウ}依^{カウ}り^{カウ}の^{カウ}面^{カウ}よ^{カウ}て^{カウ}瘦^{カウ}ひ^{カウ}り^{カウ}を^{カウ}り^{カウ}面^{カウ}く
之^{カウ}并^{カウ}寺^{カウ}拍^{カウ}崎^{カウ}を^{カウ}り^{カウ}よ^{カウ}り^{カウ}け^{カウ}り^{カウ}こ^{カウ}こ^{カウ}面^{カウ}よ^{カウ}さ^{カウ}か^{カウ}娘^{カウ}の^{カウ}比
り^{カウ}て^{カウ}の^{カウ}い^{カウ}り^{カウ}あ^{カウ}ら^{カウ}む^{カウ}と^{カウ}り^{カウ}よ^{カウ}り^{カウ}一^{カウ}書^{カウ}よ^{カウ}よ^{カウ}い^{カウ}孫
依^{カウ}希^{カウ}尺^{カウ}見^{カウ}等^{カウ}の^{カウ}名^{カウ}あ^{カウ}り^{カウ}て^{カウ}依^{カウ}面^{カウ}こ

初^{カウ}妻^{カウ}の^{カウ}目^{カウ}出^{カウ}度^{カウ}名^{カウ}る^{カウ}り^{カウ}堅^{カウ}魚^{カウ}こ

愚^{カウ}考^{カウ}堅^{カウ}魚^{カウ}こ^{カウ}カ^{カウ}ッ^{カウ}ホ^{カウ}十^{カウ}、カ^{カウ}ッ^{カウ}ホ^{カウ}ト^{カウ}、よ^{カウ}り^{カウ}や^{カウ}後^{カウ}ハ^{カウ}北

条^{カウ}五^{カウ}代^{カウ}記^{カウ}云^{カウ}饗^{カウ}館^{カウ}を^{カウ}毎^{カウ}年^{カウ}夜^{カウ}よ^{カウ}至^{カウ}て^{カウ}西^{カウ}海^{カウ}より^{カウ}

東^{カウ}海^{カウ}一^{カウ}牙^{カウ}り^{カウ}伊^{カウ}勢^{カウ}お^{カウ}後^{カウ}女^{カウ}房^{カウ}の^{カウ}浦^{カウ}よ^{カウ}約^{カウ}よ^{カウ}り

件^{カウ}の^{カウ}饗^{カウ}を^{カウ}勝^{カウ}負^{カウ}よ^{カウ}り^{カウ}依^{カウ}り^{カウ}を^{カウ}と^{カウ}り^{カウ}て^{カウ}こ^{カウ}や^{カウ}一

考^{カウ}よ^{カウ}交^{カウ}度^{カウ}一^{カウ}法^{カウ}侍^{カウ}裁^{カウ}場^{カウ}門^{カウ}出^{カウ}の^{カウ}酒^{カウ}肴^{カウ}よ^{カウ}り^{カウ}を^{カウ}饗

を^{カウ}考^{カウ}と^{カウ}利^{カウ}ひ^{カウ}り^{カウ}こ

初^{カウ}雷^{カウ}や^{カウ}漢^{カウ}名^{カウ}の^{カウ}橋^{カウ}の^{カウ}今^{カウ}れ^{カウ}さ^{カウ}り

一^{カウ}書^{カウ}よ^{カウ}よ^{カウ}旅^{カウ}よ^{カウ}り^{カウ}幾^{カウ}夜^{カウ}養^{カウ}よ^{カウ}り^{カウ}て^{カウ}東^{カウ}海^{カウ}の^{カウ}漢^{カウ}名^{カウ}の

橋^{カウ}よ^{カウ}り^{カウ}り^{カウ}り^{カウ}り^{カウ}愚^{カウ}考^{カウ}元^{カウ}慶^{カウ}八^{カウ}年^{カウ}漢^{カウ}名^{カウ}れ

九月月ありて声あり 建仁二年十月十五日
の朔誕生す時入雷傳明年の冬雷をを見て
何といふりのそと申す雷と云りのことと云ふも我
生達し時と雷ありとりて傳教大師といふ雷一
國師といひ誕生の時の盛物の乞と雷の白
きをて語らるる名師の教習を甘歎して我ハ
え日のけり達して松竹の門徒を始美服を餅
子の宴上目るれとさかすも是亦るきこと能く
思味しこと已りあるを省りられ 哀るると知りて
我等式々宿りもあやけさのま
是亦曰るるそく言きいやりきわたりて
まをむりつるやまことりらん人師是れ我の意も
のりつる一くや
驚き居ておよりつる梅のこま

愚考拾遺集家伝といふありしのをすおつきよ
福くつるも尊んを居てつるも夜居る成刻より
寅より卯居といふを寅刻より卯刻と云
梅の本より枝やくり本や梅のこま
一書入神傳鼓弘氏綱代民部と号す
愚考所載の初より山一は達那き山の松よ
よりへ枝中より本の枝よりすむは古歌よりあり
るり一寄本より本の生すりこ息と云る子息
息女の号よりて實の子をりて人生所以泣何本一
幹而分得氣異息故泣重離母義也故子息
息女といふ
是も雨を伊勢の道一よりあり
在味堂曰是れ一を伊勢れ人杖田自當之育人
りして他階も志はく白をすり毎紙より

書きて竹の筒に入れて置しるものも紙よりのを夫
舟のほりまじしよるらある白こと云く

隼の尻尾にまげしる白尾の鳥

愚考白尾の鳥とる流尾の鳥と出持國司
唐津大納言改教卿鷹飼の名匠之勢の君志
らんとりよ白尾を流尾として其流尾特しとる
よりのそらしとる流尾の白きをえて雪よりとれ
りひいていささきよく舞揚すと云く彼改教の女子
を祿津貞重と嫁す時よ聲引とてとて鷹
飼の秘書悉く附属す流尾に教の蒼蒼よりて
世よとる人形しとるや此時後冷泉院の朝妻より
文化よとるより九八百年よ及よ守古志田家
の臣下よ成祿津祿平とりよ又日本紀曰仁徳
天皇四十三年秋九月甲子朔依網屯倉阿珥古

阿珥古

捕吳多献於天皇召酒君示多曰何多美酒
君對言此多歡多在百瀬得訓而能從人亦
捷能之掠法多百瀬信号此多曰俱知乃授
酒君令養訓未幾時而得訓酒君則以尊簪
着之足以小玲着之尾君腕上献於天皇是
日幸百長世捉臘云く鷹よ六十の病阿の餅よ
十六品の梅方有流義よ三つのから何の酒謂
酒流流字於交流祿津流之鷹を多とてむつ
うしとるもの何りと皆定家卿鷹百首等よ
て知りし

葉亭の主人沈み藝ををせ

らまのる筆意の何の故あり

沈み藝るるしるまお習し柳陰

愚考葉亭の主人を王義之と晋人字逸

少右將軍よいりり永永九月三日二月十三日
余も拙書山伝の蘭亭よ余も寸晋書列傳を略
文して云文を善し一隸書を善し一又草書
よ妙なるを得んん草書と一評ふ性然るを也す
余も拙書よ孤飛するを先統あり一我も書を善し
吟をを賞むるををぶらよいよ一はけ遂よ
親友を携て習るを余も寸統義之りありと書
て、意してゆてををよは義之、歎情す連とも
うららけ又山陰よ一乃士あり好我も書を善し
義之、初てををををををよ基よありこい、をを
書ふるをををををを士の、我もよ乃往後を
写してありらるをををををを一、我之、欣然と
して写し一、手明彼我もをををを一、て海の甚
りて樂し、守、うて人よ書を与一、て云、法、是

池よ勝舟書を善しよ池水悉意一人を
て是よ醜りりのめくるる一、心未必を後
よを、と云、をををををををををををををを
我朝るをををををををををををををををを
ををををををの、心、新日本紀よ神功皇后
より、以、前、よ、を、を、文、書、傳、を、を、を、を、
字よ使をを新解よを、一、を、人、を、を、を、
と云、又、河、海、抄、よ、曰、今、の、世、の、銀、名、を、以、法、略
て、仍、り、以、前、の、銀、名、を、目、本、紀、を、採、集、の、乳、の、や、
の、め、く、之、目、本、紀、を、音、を、を、を、を、を、を、
と云、と、刑、と、を、を、を、を、を、を、を、を、
よ、云、平、七、を、本、朝、の、初、と、上、十、一、よ、字、ハ、渡
命、を、を、を、を、を、平、五、よ、字、を、空、海、を、を、
系、の、一、よ、字、を、を、傳、教、を、を、を、助、く、と、云、又、斤

うまの文字を古倭の文字の内より割きて
乞を依りて

いそのき 燈籠治を忘るる 柳子
無味堂曰 叔夜柳活 鏡日 振

はくしー 既印よまきり 一のより

愚考 古を存をりて 既を包むて 申とす
後世 方るるを 改申と云 圓るるのを 帽子と云
其ゆゑ 小ちうらうらうの 毛を花うま

既亦曰 六百番 歌合 伝定 朝に 雲はきく 松の 露
の 下ゆゑ 小吹まて の あり 夕雲 花うま

手を突て 歌中 上の 蛙 の 形

一書 小女院の 浄車の 前よその 吟るる 花うま 此
集の 撰者 柳子 を 省て 新書 集の 花うま 此
も 忘るる 一白を 小て 字え 花うま 花うま 蛙

の 秋まき 例まき 小ハ 前出る して 花うま

小ハ 西海^{ニカク}の 山吹 花うま 滝の 花

一書 小西海^{ニカク}の 山吹 花うま 新古今 花うま 柳川
岩の 山吹 花うま 岩の 花うま 柳川 花うま 柳川

花うま 花うま 花うま 花うま 花うま 花うま 花うま
花うま 花うま 花うま 花うま 花うま 花うま 花うま

花うま 花うま 花うま 花うま 花うま 花うま 花うま
花うま 花うま 花うま 花うま 花うま 花うま 花うま

花うま 花うま 花うま 花うま 花うま 花うま 花うま
花うま 花うま 花うま 花うま 花うま 花うま 花うま

今 花うま 花うま 花うま 花うま 花うま 花うま 花うま

愚考 杜詩 小田入 故園 嘗識 主ぬ 今社 日を 著人

山す 柳 小花 咲く 花うま 花うま 花うま 花うま

愚考 山す 柳 小野 蠶と 書るる 漢光 成帝の 時

五六のちまうこくを魚一名人の精匠を五梅も
七梅もきよとつらつを飲ま盛抄一住江の岸の松
の根うらさき一とよありま根を折洗ふぬく
るなりとまきこん水半は捌く精繩の敷しを洗ふ
ぬくよ見ゆりなをさき一捌くるとま後ゆりま
むさく白の意を杜律曰五月に涼草園を看弄
魚舟移白日うらふ侍りぬ一

面白うしてやうさうさう一き精舟か
愚考なりしうら思り内よやうて精のほより魚を
たりして舟よ折ゆげりさかたをえまて面白きさ
まもやうさうさうさう一さうをえりよせと一いげ
りのけまう命令の精うさきと精のゆりま
よ魚のうら一きを折まぬ多の一を仁徳に
りゆり一智度論曰一切室中命を中一法罪中

殺生罪為第一或書よ古文杖笏の辞を
引て歡樂極兮哀傷多とけり浮世のさか
の忽よ驚りを記しあまくと云く 愚老杞
りつらく此る貞室の白を程しして仍り
まらう本伴る事ハ野見未那

一書よ火桶よ梅子此花を画くる事々後
永尾院の御製とす又東後院の御好とす
り一 愚考枕字紙よ云書花と人すりりの
梅子梅山吹さ道と梅子の恨むといふ云使
のえぬやうぬのたりの一
すいつきすこきよまの炭 俵
風谷曰名抄曰火たこまぬまのすい花の心地
して人もすこぬすこまの身やとよある

よ十二の女子の姿をばめて冬のスミツホ
そ火の影をさし今がけすきまのしきと
籠りたり又落お納言すきまのしきと
よのすむつまを一番して炭俵の如く
らら〜とをりて一白の主とさるるまらり

夕歌や林をいりししの飄り

そ白を林と心持るりの風國抄あ葉太康工
既よ白紙集評林白解金花傳袖日記未
よ出守を心持遠すの根えとゆふまを古歌を
るりゆ〜るり古歌り林歌るまは此白を林
と思ひ〜るり心持る只おかよそよ見えて白
のま〜と抱らん一途よおれらひはて〜りと思ひ
そ曠野よ眼筋まの歌よありを兼おとや
いもむ又金花傳よ曰やふの白法か〜の歌

あら十七

有燈籠のるよ傳授とりよるありや〜と
古より懐〜むるまは皆安よあるまは既よ
古今抄よ曰夕歌や林を〜と白を切て讀〜
夕歌の花と飄の實とのま林の香別よと
る懐る飄のを〜とや〜と手し花の夕歌も
あらか飄よるりぬりやとほや〜と〜のやと
あら〜とと云々 愚考りみたり形りひ〜る
と〜とまを〜と林を〜ししの花よそあり
今り此歌よありあて〜と計てまおのよ又及理
るり此歌を只一しりよみとりるり字の今見え
まは〜ししの花を〜と過去も現在も皆
治定の夕歌やのや〜と〜と〜と
過去よ見えてある〜と〜と〜と
夕歌を精〜して夕歌や只一しりよみ白〜と

咲やうしてありきりきり林よる道ハいあしの瓢
よりのりと未来をまそうういひく白之眼前の
やうして未来を捨のぶる道ハうういひあり
きよめて百身の迷ひをともす毎一息をいひ
るありきのよや體を造れ一の白ききりのよ
やらおとほひのやらのやのなる道ハきよめ
つゝに未来のぶとりのきよめよのきよめ
すくよありめのきよめとさうういひ又やが
のる法かしの扱ひありゆき符のるいし符授
といひるありきりきりきりきりきりきり
連ぬるうして法のるきりきりきりきり
守て傳つるう傳文こお一の扱ひとさうあり
そんやがしの法をきよめ旧法神祇教教年月
日人名二季合傳是ふを始として十五通の

何ら十八

白よりのやがやがやがのよをゆるす功きよ
守てあききりきりきりきりきりきりきり
の秘傳あり

雲九卷 腰ヶげ 不きりむく

愚考 樂天詩苑在白雲 智仙人 岳西足 滅き名
人の手伝あり

漢一さん 板もやうぬ 本陰りか

愚考 玄音法印を古今傳授の人よりして号幽
秘集外三十六歌仙の一人あり 夫木集川をよ
るの板の美を忘るきり人の中きりぬき
しきりハ板りきりぬききりきりきり
りよあきのいひけりきり又傳授のきりきり
しきりきりきりきり法中きりきりきり
法眼を傳授しきり法傳を律師ふ准す

愚考統世説曰後唐の郁為秘書監時
張承業權貴用事与客燕陳列珍果客
敬無先嘗郁食之必乞承業私戒主
者他日郁至惟以乾藕子置於而已
郁知不可啖韞中出一洗極碎而食之
承業大笑曰為公易之勿敗吾業白の意
を感入ま堂亭一移し例の蓮池よりの實
を乞てしめて貯すし皆くひきしてぬげそし
そら蓮の實の實う実う無いと馳を乞て
の挨拶之物を乞てすも不致しつれん
無とすし白依り

さそ破孫六中一き志津を後

愚考閑錄六蓋初又も蓋え志津三帝蓋氏
を正史の才子之大和國より來住して世に

名譽の力工るりさりを今も破寺を以て
世上の精ををりふるり

破寺て我よきうをよ坊の妻

ま堂云棟の坊よ舎りて坊の妻よ破を好
みむ昔潯陽の江のほとりして樂天を
なうしむらる商人の妻の志らるる人
今坊の妻此破をいふよ坊を破くさめ
しをやとよよ字をなししをさるる江の
ほとり志らる棟の坊地を代りしよ又志らる
一書よ雅絶卿のみよりし山は杖地をさよ
けり古にさく夜うはるり古歌よよを思
出らしてはう古にさく志らるるの志らる
志らるる不らるる志らるる志らるるよ
やとすし志らるる志らるるの志らるるの

ありきむの人のいふはまきあつたうへにけつらんとやと
わりのいふ

本うらうらふ二日の月の吹ちりり

去来抄曰二日の月とりのい吹ちらると飾きくうの
りともうらふすれり先師曰若うらるる二日の
月とりのい吹ちりり名目をのそけり
さきちりり

本の紫焼泣きさひーきおろり

叙發云司る温么侍後曰魏野之侍も焼葉炉
中無宿火讀書窓下有残灯

本うらうらふ吹とらまきり夜の中

愚考夜の中を紙よそをたらひて集の
吹をうらうらるり疾気とけしき夜の中を
るさくえまはんとやういふやをわらまて

登り之五雜俎よ曰集之擊物遇暎胎者輒
敢不教蓋其仁也

美濃や羽白黒野赤りーら

空際堂云云依日記よ曰黒縁の松糸を踏て
形ふとよ水の名を黒く松の色を黒く鐵丸
流る雪のぬく貝の色をすつらよ似て五色
よ今一色是らぬ

史と不ーて衆日よ成ぬ冬換

秋亭曰初て花の蒼みて抄よりかー赤みの
はくを火と不すこりよ中よも様をえーく
蒼て何のゆよ一るとり

冬畫又より添むあのとら

一書よ樂天閑居賦曰閑居而復倚此住又添氏
美木柱の巻よりきりこりあてらよりそよま

木はしらそとむはよりきゆりりとみりて

いとけるや屠獲るあ初り人次才

愚考いとけるやを初イトケテ曲礼曰人生十年
曰知又本草小品方曰屠獲此華陀之方也元日飲之
辟疫癘一切不正之氣造法用白木挂心七及五分
防風一兩菘蕪五及五分烏从二及五分蜀椒楛枝大
黄五及七分宛赤小豆十四枚右三角之以縛袋
盛之除夜懸井底元且取出置酒中煮數沸
家拳東向後少至長次第飲之兼淨還投井
中歲飲此水一世无病と云

年毎ふる活の故の 蒼の那

愚考善日季々清和天皇貞觀元年十一月
九日始て初とる二月申の月と善日大湯祓と
稱徳天皇祓護景雲二年正月九日和列三望

山岳岳跡之同年十一月九日此造嘗と云又曰
善日五岳岳家の祖祓とるの祓祓詠よ曰と
らくの南の岩ふ家活して今とさうえむ水の友
浪詞苑集よ善日山水の友浪嘆しよりさうと
とあるひてありよ手又とる活の出入とせ死の
表よりして入時と内出の時とありと云
爾雅曰鷄棲於干為櫟鑿垣而棲為柶又詩曰鷄
棲於桀去うまハ鷄棲の号とるをを表と
書と大木ととるなりと云や鷄棲を善木と書木
との間と棲を名ととる略して善木と書木
とるなり華表ハ誹謗之本造り方格別之
書善木と云けりよと云

愚考伊勢石清水と二所の宗廟之欽明天皇
三十一年冬新國宇佐郡よ結産と後清和

天智天皇元年八月廿三日今の男山ふくは
しあふとくは原時宗の始む村上天皇天曆三年
四月申午の日平将門退治以祈禱の爲るりと
云く去後三月よ改めあふ花多余懐ふ日原時宗
押頭使放舞人権陪後山吹と云く正徳体抄
よ定家卿ちりあふとく一夜よすあふ毎竹の大
まふ人のころあふ権る

そふの月やつりてよ流る佛 連

愚考云る傳傳曰四月八日浴佛以五兵水灌頂又
法堂法敷日灌艾納都梁以上灌佛の三種又
と云兼和七年四月八日律師靜安法涼殿よれ
いて始て初ふ又推古天皇元年始て灌仏云初ふ
と云る

面瘦て葵付つり髪落

愚考競るる文武天皇受雲二年五月
五日よ始るころ

あ 菜よりの七夕をそねえよき

弁地白万葉小秋の野よ咲る花をそふよと
てりりきころあふとくハ七子の花又萩の花尾
花葛の花撫子の花女帝花菜草舞の花
あしききの夜うへりて帰る 花

愚考十月朔日百友夜を更へん此日群臣よ
水魚を給ふとくよあふ百友同く一意よや

舞姫よ哉 夜指を折るり

愚考五葉をえ日白る踏歌瑞午を明く
年中初事曰十月中の世るり本朝月令曰
清見系とく皇吉野の宮よ在りて琴を弾
あひあはして天女天降る琴声を感し五夜

袖をひらきしりて一袂ふし女子をを
めさひすむらあ方をを乙女さひすむら
らりし方を公事根元曰舞姫を五人こそ
此つよををんる歳度とらうらうらて
あつり定法えさるををりとあつり
度指ををりしをとりて見えは八日あり
白る踏袂指年をゆと教合五度ありと
治定ししきてハハりともあつり
あつしきてみんりて申し凡魚の及み
よ阿し能しれりい味りて感好すし
曰雄略天皇二十二年外まは
付天人降て神樂を奏す此例よありとい
つらつきよや

愚考延喜式曰方相といふもの面は口目を
付て鬼中ちひしりあり極の号是れ矣
を執て宮城の口門よ儼よと云く
曰文武天皇三年始て去牛を
て疫疾を拂ふと云く此夜豆を
儀志曰養分之夜散小豆又名物六帖云
曰大面出北条崇陵王去茶性
人自蠟不足以威敵乃刻木為
此語歌十六句各歌よて
禊罔の撰ひのこし
愚考禊罔を一系禊罔良公
大御刺髪して禊罔と自稱す
新嘉のきこらうお

弁比曰きこふうを承るり玉簪草と書全体
擬宝珠の系字あり葱の花をきこふうといふ
糊賣を露の露のちいさく流いころをき
こふうといふとてころをきこふうを承るり
るり後いふ九十九巻とり

五美人

うげろふの抱つけん 我夜に那

愚考李夫人を前漢外戚傳曰李延年妹
るり漢武帝在宮中又曰婦女五等あり
后夫人孺子婦人妻をり漢書曰上思
夫人不已方士少翁言能致其神迺夜張
燈燭設帷帳陳酒食而令上居他帳遙望
見その時夫人の姿ありしと何れをり
帝信を信りて曰是邪非邪立乃定之偏

何れ二七

何冊に其来違又夫本集の李夫人の歌す
雅有歌ありき人ありつる煙りもをりあ
いありはらさそおれりやういぬ

愚考揚貴妃を弘農の揚貴珍の女あり唐

玄宗めして此とす貴妃を女友の位あり
て后より相國より比すと云く夫本集の
言を揚貴妃より歌す貴妃を女友をり
めり花の色むりの人此面歌をすり

りの数ありやむり一の妻の侍をり

愚考昭陽人を十六卷よりして漢室より入生
涯帝のいはいはらさるりりといふ夫
本集昭陽人より歌すの歌をの朝をり
るりやむり一さるりりてとてこれ

六十年の空ふらふり

花粧り極り一らる牡丹の形

愚考西施を會稽の人物をいさく街の娘なり越王勾踐の宮女なり一を范蠡諒て吳王ふれらるる意明らるる百川学海曰西施を牡丹芍薬に比す王隣の詩芍薬法來功已成毫音終日麤殘生吳王美在應多恨写醉西子不負情芍芍薬を牡丹より改めし子細を芍薬を植り一連ハ二年を花さる女を牡丹と極り一連ハ蓋し花のよる一連ハるり是則西子より比するなり此西施より夫木集一陵園高の歌るるを西施と入習るる沢多陵園高といふ

天子遊侍ありて陵園よ入是宮女連の号ありて甚忌しきりの事連ハ美人と振替りて夫木集陵園高より歌すり歌二首善の然杖の慈のほりりはく三代よも今もれりよるか松の戸をとらてうその日よりあり夜もあきさめおのひう歌三玉集月さういふ見さうお松の門いてやとれりと端とてぬを又白氏文集よ松門曉倒月徘徊拓城今日風蕭瑟詩歌とよみその意思らるる隨煬帝と

よの本よの柳うか

愚考漢帝卓子小玉昭君をれらる昭君ハ三千第一の美女なり画工の禍ふよて止る

をばさきとてんるり云子第一の女なり故よよ
の本よもあきしれぬと白ゆせり夫本集王嬙
君よ歌すの室家けうはすともくありあらしと
そのみろくしみのけのまのけくきりる又五
雅頌曰西子失身吳宮王嬙蕪絶異城昭
陽終為禍水豨豨兄身尺組絶命不ぬ
去者不可勝数矣此五人の美人を出一
をりあつても夫本集よるるりよるりといふ
を原知有つし初まてよやてさいやし海の
序よ何故よは名ありといふををるる
何事ハひらあくるりとたりの族もあると勝
次第よすし

七夕よりのくすもるるさむり

愚考 七夕を公事根元曰孝徳天皇天平

勝宝七年始めて初りくとなく又爾雅曰新木
謂之津在箕斗之間則天河也劉炫曰
天河在箕斗二主之間唯南子曰烏鵲
填河成橋度織女也俗傳曰織女七夕當
度河使烏鵲橋集林大斗記曰天河之西在
星煌くとと參俱出謂之牽牛天河之東有
星微く在区之下謂之織女

時考 時ををりよるり

愚考 最房に多万里小路正二位中納言
帝よ凍衣を献りて以身ひるきりるを見
賜りて世を遂れ多いて初来志く人と太平
記よとをくり時よ年三十九中古の賢人
本朝の云忠臣とす命り建武二年三月出
家跡心よの二祖宗綱と号し迹倫隠王

いして奪胎換骨の法あり

電燈の 鬼 獄々々々 孫 世が

愚考琵琶橋の名古屋より津路への往還
ありあり長六十回余鬼獄を美濃よりあり

関ふえて爰も爰も爰も爰も

愚考夫本集より美濃の巫不破の中山電
牙てと流り水の関北菟川爰もその吟あり
一々紫菰白の之坂を六中と白妙の我衣
自らをぬきよりのも爰も爰も爰も爰も
あり宗祇法師を連歌の中興之記刻
の八和歌を一條禪園よりつけ東野列より
古今傳授有集外三十六歌仙の一人
又無二年お別湯本より寂す年八十二
吾輩出て布子賣を〜更衣

愚考旅中の更衣より賣うつるもある事と
花より事とあり布子なる事ハ賣惜〜とあり
古今集より橋色より夜を深く染て若
花のちりりる心後のう〜みよ解よ若
のりりる事ハ

五月西よりうれぬりのやせいの橋

一書よりま角曰此橋の名大う〜名下よ
ひて矢矧の橋とあり一きりや若橋の
の天よりりり勢田一橋より限りへう〜と難
〜りりり〜京大津より安え侍の去来う湖の
水よりりりり五月西とりりり穢よ四鏡一面
よりりりり水接天と見えぬ八条を亡せし
ありりり一橋を見え侍〜り時とりりりとい
ひ一りりりり京物のう〜りりりり場をいり

て及一きやま季のおよあはるるはとりり
誓老の敷ありへ

手よりけりてあはりのあり此は月毎

一書りの方業山城の強田の里よりるをわは
君を祀りへはうちよりそゆくは秋木幡考
田るるるる筋ありまといふる勿論牛あり
とりへありへ

みよりけりてあはりのあり此は月毎

愚考見る千手経曰若一切之众生法天善神呼
ハ當手自法螺すへ一器録曰螺の物をり令
命を下し事を解き夜を告報ふ合をては
雪をのりりふ寸勿論生貝を用少資は付
記曰天日如来南天鉄塔吹大法螺者说法以此法螺
授教迦教迦牟尼示給樹菩薩中暴神

去後箕面滝入給樹菩薩淨土奉値遇
薩傳受先身之時今於有大峯吹法螺
者警之众生無以眠方軌也自回自善して
云若輩よ貝の音をてあはるるは
いし給る手しをわはるるは
白くくくあはるるは
居るるる推えりりるるは
えりるるるあはるるは
類白といふる鐘と貝との間を眼見え
えりるるるあはるるは
六月より七月よりは
故よ以後の式ありるるは
去りり申古よりのありるるは

武ホリノ六月十二月の晦ハ此後あり全書
曰金峯山を例の自震且飛来の何一不
能来の滝有則六月朔日之故ハ六月の吳
名ハ後ひて林滝と号す是時日本ハ
ありて滝あり人甚きを奇とす五經通
義曰滝者秋分之音也此山ありて滝
の音より峯入の貝の音より流りて故ハ
いふ林と名する故をりみよりのをの
をの字よりも悟りへしをのりあえハのを
おもとりのりよをををるり

夕月や杖ハ水好あり角田川
愚考淮南子曰清水水者小溜水水者
大と云く杜詩曰挑竹杖之引云杖竹杖
爾之性也甚西直慎勿見水湧濯字彙ハ

角田又金将石试水将杖试銀将
试と云くハ角田川を平均りて流よ近く
水の流速ハ水好ハ流音溜音を去るハ
一夕月の流る事ハ目して見たりしハ杖
をりてのりよをりし音をよりのりて流溜を
試ふとりよるり

唐古ハ富士ハ六月の月も見えよ
愚考三国一の名ハ角田ハ六月十三夜ハ本
朝のりのる事ハ我朝自負の一角ハ富士山
を士を富士と云くハ神を女体
るりのりよ

富士の富士葉一ツよハ
一書ハ富士好なりてありハ富士の根
ハのりよの是ハ富士の古歌云るり

文級の月を二人よ見えら連たり
一書よ祖翁の蛇一人位とりよ二人よ見えら
あつとを依らまてり

狩野桶よ鹿をぬけよ杖の山

昔の言曰一説よ狩場よてまよ桶ありとすり
非あり一―狩野桶と号よ法眼元信
未曰帝次帝といひ―時甚多し―て終々の
料よ充むとちよき桶よ花を芽花の敷
を画てひさのをまると云てまよて持傳よ人
あり是よ傳よき―て鹿をぬけよとるり

澤庵の墓をわつ連れ杖の書

愚考沢庵和尚但るの人名宗彭大徳也
住穢尔川東海也其墓正保二年九月寂
墓印唯一箇石耳

あつ三十六

字松太も志らるり夜りの声

愚考澤庵悲冷野干悲雨窠よ居り
まよをりり―心故よ大も我居り下よ
水のありりをり―みて考をまよよ
やとるり

いく為紫を連ねと袖を不ころひ守

一書よ衣のあつとを不ころひまりのうつり
るしむとるり

天絵てまよ―う連ぬ雪れ書

愚考天絵川を源位列後傍湖あり
始りを列考因形小出大天絵小を絵の二
節ありやれ毫々本朝後園十洲抄曰多相
院の北面佐茂を清厨憲清羽衣を脱して
閑人と成西新と号くまよ個人も又志を回

しうしてお後々西住と云既よ東よ類
のむとを江國天龍川よなりて才を武士
のきくする船よあり船中人多くして船く
はらひらむとす時よ武士は素門下りて退座
しと突をうし一筆をりて西形を打き既よ血
をそくく西形おしもうらみ懐るるるく優
然として船をそく船を去る西住を名て甚
哀泣す西形の云余塵を出一しあり以来
減し茶渣の爰よ及するを初り不慮の禍
是より大形の多ありとも又物をそく連一む
物を争ふむや世宜ししく古郷よありしと
西住止るるをゆけ東西よおふれ此は白を
只く堪忍を大切るをよよのきぬら一し又
十六夜日記よ云天龍のわたりとゆふ船よ

のりよ西形の昔ちれりぬきりて心かそし
里人のわたりは 檣 杖 雲
愚考七文字を例の箇の詞よてゆひはるる
温庭筠の詩の一聯 鶯聲茅店月 人跡板橋
霜又新 四歌集よけさをあし人よのよ
ぬれ見ええてゆむなくもさるるの板橋る
詩のの類よもぬらるるや
きく事と二人旅床をよのりし
芝山曰 因話旧 拾遺 不恒 炉辺 讀旧 考方
明一宵 お對 余 事 燒 竹 烹 茶 記 我 曾
きゆり時を氷よ消てくしよ
師子曰 談話考 曰 勢 易 尽 者 若 冰 山 有 時 也
ちり花よよふらとぬらるる 聲 聞 縁 竟 の 便 也
愚考 花 花 為 紫 多 声 聞 縁 竟 の 便 也

唇紅又漢武故事曰幽吟錄曰武帝侍
幸下後入同車の美女十六人自然の美
麗ありて皆素面に更に入粉黛をりさるは又
ほか納まふ女をその邊をよらるるありのた
めにくそらほりすと云く是則そをの邊をつ
しむ心ありといふ素をうらみてあつふゆり
くさそ故入悪の顔の首有るを故一撰集
の人ま心ありてあく

きぬしや余れりるも時を

愚考杜詩 神吟して宵人を離れの悲ありと
を考つてのるこそまは遠集ありも志のあふ
きりてわさきすりのたりの宿るを
らやありむ御してり古詩を故古るあ
るく白下流るるすらす忘るる只白下向して

を解しきぬよりのを並つてその白此光
をくらの斗と一詩よあり秋よありといふ
るりあてあさるる一見む人六指の罪を
外りるるるる

出かしの目あつ枕あつい

愚考詩曰角枕繁兮錦衾爛兮予美亡此唯
与獨助又白氏文集曰卷卷尾冷霜花重古
枕曰衾誰与共又卷白集よ古き枕古き
あす方のうほりあつあつあつあつあつ
あつあつ

出かしの小袖あつあつあつあつ

愚考万葉よ我妹子うらみの衣下よあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつあつあつ

多くと云替て女小忌を替くると又をりーの
らんや

さくげめー妹の垣根を荒みたり

海川百そむりー妹の垣根を阿事いあり
はるるありー正のす弁事の開ーこの付て

妻ありーと家主やうりー女帝花

愚考白氏長夢集よ移根易地莫惟悴野外
庭第一種鳥少府無妻春寂寞花開將
爾當夫人是を薔薇の歎之夫を女帝花
よ替て家主のうりーと依事ありたりー

志の照りー薄よ照りはるる戸下

元紅曰括遺集をくくとして室の妻戸を以
て是は人々も志急のらるる之より水鏡のこく
を替のるると

ねれ中志くく花のよありりる

愚考慈法和尚我意をねを時五の染りて
去其りるよとてなくと花の嫁入を依替の働

ちる花を南無阿彌陀仏とゆふ屋下

ま角雜談集よ曰唯一の神威とーて此境はあら
ありありー是時一時の感偶るるむと云く 一書小

守武の辞世を越方すありしゆくす急も神話
山峯の松樹し 辞世とすりる翁の遣るり

寒松曰守武を天文十八年八月の卒去るりらる
花のるる某亦折の短尺よ菩提山よめてと

詞書あり 愚考撰志の辞世とて書入

しる鹿おるりとりーとて敬て遷とはいをれ
ありしるありー辞世の意味るりるありー

遷りりりへへ遷吃とーとて辞世の意味あり

声聞歌曼を花苑曼を因と守ちり花
を唱へて世を悟り弥陀の名号を唱へて
夕の歌とて未だの夜も見え侍り侍り
此のよき梵音お通の玄旨を合み彼と
是といひ辞せと見えて難す一き亦る
も後神よりと思ひて序文を以て書
多む菩薩山とあるは此のよき感す
あり或は説ふ曰美提是所求之佛果也との
のり意味をもたす只一涯に誤とす
の眼を借り海月よひと

笑つちりつ降るるきけりれ畠
於柳曰秋氏要覧曰生滅輪回曰世
老少不定の義よ丸くの義も則
ををめするる

南無や空を有ぬのふとす

愚考悲華經曰佛言南無と云決定法佛世
尊名号音声と云瑯琊代辨曰秋氏
祇佛菩薩名号皆冠南無二字と云源平
盛衰記云重衝卿の害をらり時時を此西
よ向て啼やりのを連はれりあるこり合と
時考げふりけりきり西へゆくる被是思ひ
合と云ふていちあり

橋のりあり教見えぬはりあり

愚考日本紀垂仁天皇九年田原間ちり命
て世世國よきて橋を求めり十九年天皇
崇徳天皇三年三月改朝台意を以て之と云
さし手よつとををちりけり魚をうけえむ
一の人の御の魚をすり

阿の事とせつや燈籠一ツ 小主コ母

愚考燈籠多四月日記曰後堀川院の御時小
多云小用少と云く東鑑曰追福万灯を
於朝公為救平家灵魂孟業多云万灯
供養被祈と云く 一書小主コ母を荷号
ク別号ことり小を非有り工母を比戸の人又レ
工母とよむ一 既小神懐紙の連るより見ゆ
並落や小阿の母此見る事

愚考市原燈を其有祓の个有り小と云き
の南の方小有るめの為とりて整養と
小阿の母と云別落る日一 小阿を兼和の
以小燈良實の女有りお坂にて死すと云
又冷泉家の書小十九歳并出寺して死
すと云有るめの為其に家次并曰異刻八十

阿の四十三

島小阿の事と云く此阿ありと云く
あつと云はたもても阿をめしをの
為たひ多り孝吟曰下の句多業平朝臣
の附ありと云く此と云ふんハヤ切てよと云
二重切之是又人名一の傳授あり

女帝苑死出の里人そ建すの心
愚考朝古今集よひりりりて阿をたひひる
る寺人多旅のそもやう有りりり心古歌
地火さきゆや泪の意り 書

一書小若嘴子めり阿ひぬ古寺に泪をらき
りりいよのゆきこの数のみりり小
高りとる朝らり一みこ

神燈やたひひりけり温祭像
一書小金系集神燈のありとたひと文

子午のとき花のいさくけぬ船のちるし西上人の
右釈の九なる一——愚考指伽經曰涅槃不
死不生之地也一切修行新歸依也又法華
云上金口親宣曰為度眾生故方便現涅槃
廣如壽量果又後ハ言傳曰昔優曇鉢初
梅檀亦波那始獲金貨皆現写真容圖
妙相と云

とにきりりと有明跡のさくらさ
博山曰双林寺中亦西初梅とりのみ有花の
よしてまゝ死むまきさくらを月とりの秋を
云含めしりりのちり

連翹やまを日と忘不れり

愚考是又やりのの二重切りて秋教之日あり
傳授の一の西初法所を建久四年二月

十五日寂号円位儀者太秀瑯の後亂之狀く
かしくをさるみの集の附るよみありと云

本履らく僧も有りたりるの花

一書よ此白る初教よその白之信少納云とあり
傳るりいと云

初障を癒てましく花の寺

愚考三井寺の吟るりとは是ゆ山々汁を獻
山此るり寺と云りる云半と之撰集抄よ山
と寺と云り悪きり此有て山のるよ寺焼連
傳りしとありる是之源氏入麻をりて琵琶
をまきしりよ此詞を摘てま入るるあり

花よ酒僧とも徒心墮者

一書よ浅草日輪寺の僧と連歌のり
とらふ對無してと信書あり陶淵明廬山

の交りし惠を法師より魚肉をばきつ付
しるるれ情のやと云く

貞享戊辰の年弥生朔日

東照宮の別當僧正の山房小

慈惠大師 辻庵執事 法華

八講の侍より一書きしるるを

融信よりやとりて序衆のあつるを

散花の間よむらうはるり

愚考 東照宮に別當なる東叡山内寒松院と云

慈惠大師よりえ三大師のより天台 龍溪 融

院の良源とりし自分鏡をととり教を写して

曰我像を墨ふもを邪魅をさげむと云

今東叡山よりあり所の像を弟子等起れ

等と云くは戸抄子より民初法眼の等

ありと云く寛和二年 正月三日 入城と云く

法華八講より僧八人ありて一日二卷宛 講する是

とこのや石淵より勅撰延暦十五年 友榮始

の母の冥被より終きりし所の始ありと云く

八講とりし布よりか賀玉より出す是を法華

八講初より僧徒より施す料ありとこのや法

華第一序品より曰天雨曼陀羅華摩訶曼

陀羅華曼珠沙華 摩訶曼珠沙華 散

佛上及法大衆

不ありしと云く 因や曼のれ玉

愚考 龍女成佛の事より法華経持護

達多より曰いむそ女才速より佛より成る

を始むやと云く 龍女一の宝珠有僧屯

三子大千世界を以て佛より有る佛則を

連因母陷餓鬼獄中故設此功德令法餓
鬼一切得食也

新うけの火をとりの虫れうりしよ

愚考新掛切菴益惣鏡あり

魂より作り酒より酒をとる向より

愚考孟業益經曰七月十五日具設百味百菓著益
中供佛之瓶より百味百菓とるをこれと横念せ
しる酒をとる向より一孟業益を日本
紀曰神武天皇三年秋七月十五日須弥山北形を
能る寺北西の愚ふ造りて新ひありと云

魂より作り道より作り惣業あり

愚考りの能る寺の西の愚の辺のる作りあり

りの人阿阿の系物ありとて水鏡と

郭とを喰ひて系志を感して哉

厚をくらりし

厚くハぬ心佛よりなりとぬそ

愚考阿阿の系物とて年中十二月より下溜
多経雲雀杜鰲水鏡抄鶴厚郭鶴千多水鏡之
十二月能るとして又十二月能るありとて此
仏の習ハぬしりし経の名ハ忘れり西域ハ比
丘あり群下の能るをくらりて我食ハ亮一と
別地ハ落つ佛の曰是厚王よりくらりし
則りて厚の境を建ると云

燕ハ以寺れ報つて

一考ハ難波の海ありて舟ハさいさうらう
るしりの曲をうりうり入目をやねきうし
ふ今の大報を波る事ハありてハ寺つて寺
愚考報をうりうりの初斗ありて乙多と寺の

詮を阿^ら——夫木集^ふ人^すす^まて^て陸^も音^をを^あ
古寺^ふ狸^{のみ}の^みハ^て報^うち^を連^狸の^みハ^報を^て
う^すす^るを^狸の^腹報^とり^しり^は連^とて^乙を^すす^る
と^き報^をを^てう^すう^すと^し知^し——^する^をを^あ
寺^の舞^行こ^うう^はと^りハ^報を^をを^あう^り
を^て報^をを^則太^報る^りう^すう^すと^りハ^報を^を
り^て帰^燕の^杖ま^とる^り名^人の^身陰^を又^を
格^別る^りの^之當^時の^人の^割取^とを^好む^も又^をを^り

時^の子^ふ木^終を^うう^す法^師が^し
愚^考托^鉢の^るを^食を^をし^りの^を連^とて^未世^の今^を
ふ^至り^て縁^托鉢^るを^をす^りも^う法^りう^す世^のを^ら
ふ^すと^一の^主と^るる^ま右^ふ湯^杖を^あん^ん
ふ^鉢を^お七^家限^りて^食を^をし^り比^丘の^法律^を
う^すて^鉢披^とり^こ濟^ふ七^種の^木鉄^金銀^銅

瓦^甕る^り又^鉢中^の飯^を五^ツふ^かて^一ツ^を
縁^行の^飢人^ふ施^し一^ツを^水中^の底^にふ^し
施^し一^ツを^陸地^の底^にふ^し施^し一^ツを^を
七^世の^父母^及餘^鬼生^るふ^施——^一ツ^をを^み
法^り食^すと^て故^釈す^曰日^食上^分を^をて^て
曠^野鬼^神の^分と^り或^を河^利底^母の^食
と^り或^を魂^冥神^の料^ふ亮^つ普^く法^鬼ふ^及ふ^ふ
故^ふ散^飯と^号く^又律^の法^ふ其^数七^粒ふ^限る^る
又^生飯^三飯^三把^と書^るり^たの^く沃^{あり}
と^りと^りの^候や^夢ふ^おあ^らむ

愚^考強^倉の^安國^禱る^る日^蓮上^人正^嘉の^未
十^の文^應の^初り^て四^ヶ毎^の間^岩窟^ふを^黄り^て
安^國禱^をを^製儀^しる^ふ故^うり^てを^早う^とす^る
雪^丸や^りの^二五^の行^脱

入乃とありてハ後倉山系よりなる事也やと云ふ
やら入見ゆ

絵了るる人のうしろの極小

愚考名物六帖云朱子語類一漢 桑河用
清龍狩る皆以木為之已是紙錢之漸と
云々神宮を献祭代つことと云ふ

彼麻一度より流す 此後より

愚考五雜俎曰曰呵之相禪皆相生者也
而禰友禪於杖以火尅金所畏也故謂
之伏彼者索身也廣句曰除災求福謂之
彼未篇を志する屋々々示篇有りといふ
以彼より世談同書曰天武天皇白鳳三年六月
晦日大彼朱雀門より集りて彼の式あり
或る又名然の彼といふ

何れ五十一

此月の夷を大らふる事あり

愚考愚比原を奉代主命より大國主命の
以有り大國主より大黒有り神及名目歎
衆鈔より日主の事敬す一きり事をせ知す
の奉代主より大黒有り毎家此父子の
尊像を合せ奉りて敬奉する事也吾國家の
法神事を待りの物を此奉りて心也
有身より幾代より有り後世あり

愚考律書國基の歌年経連と老をせん
して和歌の浦より幾代よりありぬ玉津島此
歌の初を此奉りて有りありむといひけり
るるなりと云ふ

君り代やみりくまの事 玉模

愚考隠倉右大臣子代横伊豆の清山の玉

形をそそ人を驚かすなりけり此意を説く

虎虎如後を〜と虎の追はるる人

ありて習色をます

成英曰小学致知類より程子曰嘗見有於虎傷人者衆莫不聞其間一人神色猶變問其所以乃嘗傷人人孰不知然聞之有懼有不懼者知之者真者不真也

猿を穿て突より三声の涙

太師曰杜甫秋興之詩燕府孤城落日斜每依北斗望京花陸猿實十三声淚奉使虛陸八月槎

猿の語を忘とるよまふとて

一書よ猿の字に書換よやと云く 愚考猿

を一寸針よ三寸鉄よして修りうらよいくも

流をばり山流又をすすりたる山手鞋のうらあをき流て歩りすりりのと志とるるを立しりとりよ又をみくく形ありと云く取次と書ま本集よのらきとく紙の山流の猿すりま電よ志はあぬ身をりあよとく是を本篇の猿あり

一の解ありおこ〜米うり

成美曰楚辭の注よ曰以蜜和米麩齧剪して是を修り拒殺とく 無米とく書

武士の驚うつ山もふと近〜

一書よ驚あ山とりよる漢波ありと云く愚考驚あ山とる驚あ山とりよるありの神てあるる驚をあむら〜とよよ一集集驚の類あ二集山回驚あ山行回驚あ三集白長法回

西回蒼鷹四葉兩斤回又曰雄ハ兄鷹といふ
唯鷹を才鷹といふ又廣忘曰一葉黃鷹二葉
松鷹三葉青鷹

立くつり 松のむきつり 乃の 鴉

愚考名物六帖云燕回鴉曰戴石屏之詩小
麥麩胡克食松明夜燭燈是之涼山之
志松心有油物如燒山西人多以代燭頗不
畏風箱根或を鞍するはうくまへ篠竹を
束祿て賣るとり

于台いとまむ 小山北 寺

愚考若校口と見えて大系子方の無形有
僧主多細川玄首法印之法眼紹巴の宗匠
よそ懐紙を鞍する寺の付おとまり時ふ天正
の氏とや秋ふ小山北焼う梅や咲はくらむ胡

る夕るふ花の鳥のーて

秋をふかしく 盗人の 妻

一書ふ樂天の詩ふ大体曰時心總若然中斷
腸是秋天白暮是のらりこ

柏木の脚気の 以のつくりと

成美曰源氏多菜十書の以不ひよりまい
りはらひ傳りくひやうとりよりの不きくはら
るるししうあみくはらるるも傳り氏和名抄
脚氣一名脚 痛俗よ阿之乃介

うましーとあふ不彼の 万依

成美曰文德編年集成曰言野山よて秀次
の扈從不破万依十八菜人しととふ自害
可ふ文祿三年七月十九日

を 淡や浪ふ 志め せり 樹 元

愚考志ぬを標るりの又帛と水面よりさすメ切
るりの是より是よりを流るしと漢意の指分く
を流る仲より仲より仲より至りて多分入込
ふすふすより仲より仲より焼帛強帛の敷とハ
又格別るりの裁ののとり又裁さし

杖燈よ女くふ万の 装 男

一書よ今昔物語よ曰流儀燈の意よ紙出て
往來の人をさるやあすより一裁光物長皆し
めと連貞乃車武等よ何ら連う連ハ女車よ
なよてせう一あよてより果して盗賊ともあり夜
服を剥ぎむと立より何れを女雄郎何れ紙
の之紙をさ捕しとと

袖を流るるを 流儀の 法場

愚考え亨 歌書曰流儀法場与元明天皇の侍

宇釈る昌の因基傍初の衣の袖入虚空を
菩薩のゆくりりあらと連あよをその袖を切
てその後安置す

美しき 襷 うきりきり 去此水

一書よ古詩よ云備魚浮春水

柳のうらめりあまきりり の 卯

愚考端埤林の末よいつり本学のうらあ登り
つめて子をうみ智るこ標埤と書ていふ志りの
子の方きりりのすとりよその形のあ中一をさて
よや伯父のふりり又ちいのふりりるとりよ下学集
よ曰五月の若端埤の子化す則七十二候の氣乳
るり孔子家語曰貴八月よりして化すと云九月
より四月と以上八月と

夕暮 染まりの 流てりりり

愚考なるを服しぬ二をを思ふ人よ五雜
姐曰胡妻不出市夕霞走千里夕霞を日如
る建ハ漆物も出来上りてををえて歸る人之
考ひききき勝角力とて

愚考角力此をりを祢代より色ありしを
人の代しるりて多垂仁天皇廿七月當麻蹶速
を解るん宿禰の投殺しを亦飲を悉く宿禰
よありと日本紀より見ゆ一説よ考を勝方一を
まは財とり入是う非のその起りををあるん
うよよ又おひるらむとをき出り
考ひし 祢のけの本のり
火鼠の皮の夜ををうけぬ来て
涙見せし とうち笑ひはく
言みより踏らりてを落よる

法注皆曰火鼠の皮夜を火浣布之竹を扱
くくありくや姫の古よりありと 愚考始の
二をを竹をりの語いと有りちのゆ子の引く
一の身を解しはく玉の枝ををきししてさ
らよりつらさうましやくや姫玉の枝ををりす
とてやれこととてせめて見はれハ云れ葉を
うせれる玉の枝もを有る中の一をを大皮
あつの子むらし引くり解きたりひふやも皮
あるもありてりかきりてやあそをきあかやく
姫皮あそをを焼て名跡ありりゆとありとを
皮衣たりひのかよをて見えしを後の二をを
いそのうみの中納言子安貝とてとて着て
腰を赤折るりををけきして引ひをる有り
りのを焼くてとえぬ命をすらしやハを

うらむ登壇ししを授けて彼を自らよめ位の
印のまはたうたぬとときくはるやうとこの山の上
丘白くも竹とりのおぼしや火燒布を唐の火列ふ
極む嵐のりの鉛巴りえ山の長さ三十里火嵐
去と云尺此毛もて滅とるなり火嵐韻序入火
不焚毛長丈許可布不謂火燒布是也
一書よる上を生款お越るり是らの極の糸を
あつるなりと云くするよめてるく言みといひ
よみちるまむ

何るもお志めわらるる花の款
月のお不ろや花を井孔君
灯よ手をたおひはくはりの地
愚考獲夜ふ花を井の君か後一語あひ
ふ威儀師の盗て連るるを大將の目よとる

己とくうへーあひて堀川の花を井の款
はまきをまつた水鏡ししては君奪連るり
お社とるきはくも燈灯火してさ己をを
款を三句めしして治定す書しして本文を見
る一書に花を井君の之阿書よ引引せ
らまて入水の侍ありとすりるあさる
おぼし向るく四つりのあさる

隆達も入書よ奪の志はる
成美曰隆達も日蓮傳の還信あり小うこの
上よりして隆達と云又投書とるい泉刻塚
の業底あり
引於し車を枇杷のうまそ
あつるまらるる人のうらまひ
一書よは三句めか養の車あつるまひの侍こ

愚考源氏葵の巻六糸川息所と列入の大位
の北の方と葵の上と車立亦よ仕下ととの
あらそひありていとさうじりき鏡ありいさ
る略し平琵琶のゆ木を書換るり

六位よありし意のうハ章さ
代まゐるまをそと安しと交むひて

跡一巻よのけハ一

愚考伊勢りの後曰業平朝臣いさの必よ
のりの使よ下して新まよあゐるまをそ子ひと
より丑之の迄ありよまのいあらりまうらあ
よつりまるとありまの道ありといよ糸川向
出れまをまをまうらりて六位の侍あり
あまの仁明帝の皇女怡子内親王は時
業平朝臣六位よてその後貞観四年

あら五十七

位よ叙すありまうららとあまよらとあり
まののうりの挿振るりの実まは時懐肚有
てまのそまゆよま意のうハ章とまはま
りのこ代まりの附まそのおまを
言階師尚といよ新宮殿の言階家るま
今よ糸ま叶まのり以上関類抄の畧
文ありまて跡一巻まを合百止るり京あり伊
勢一三十六日往來七日ありて詔相之御一
まをま藤甲の用まをうて雅よ御まよとハ
ま能階まのま名よ代まをすりま伊勢まの
あり風雅の心をまに心をまて五歳
七道をまれりめくらすらゆよ百止まて
のりまを定めまの表ま俗法平法の類まを
見ま内心の大腹中まの跡よま正るり

約の宿きのくはるは流き入ハ甲斐

愚考約の爾雅曰小馬之事文後集曰馬二
歳曰約又初やらよもの三采をを約とりよと
書りし其以曰季和語曰十三日とりよる甲斐
の約逢十五日を初逢もしく今宵此月よめて
此よりも言探さ初逢一く志るの牧の是日の
約引きて集り初逢りと云く公事根元曰信流
是日の約逢を往古八月十五日より朱雀院
の此國志よ初より初逢ハとして十六日よる
うはと云く一有り十七日を甲斐約逢と云く
さし事ハ十六日を志るの十七日を甲斐約逢ハ
公事根元よよりとりよる

杖の何く一ハ昔淨強勝

愚考杖亭所持の巻物ハ昔淨強勝路りて百

何ら五十八

十余年満野沢角の両檢校平家よハハ
く琵琶の妙手一ハより淨強勝物語と
りハ双紙をほりて一ハして業師十二種を
いよとり十二種とりよるをとり出すを以
て之強よ初よりとりよるを初ハハハ
ひらき初より初右の初ハハハハハハハハ
此紙とをとりよる一ハハハハハハハハハ
又初め初より一ハハハハハハハハハハハ
初を去之序とりよるの初ハハハハハハハ
觀覽交し初て淨強勝太夫入受候多ハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
五輪碎 是ハハハハハハハハハハハハハハ
辛卯年初秋吉日竹本筑後極後系傳教
花押阿り是ハハハハハハハハハハハハハハ

為此若尾順而不收抵腋下則捷又格物論
曰猫捕鼠歟且暮目の星く午時豎りして糸の
ぬし其鼻端を冷唯夜至一日暖く

花の賀みよさうらうらうり流るつ

一書曰多田満仲の口男美丈夫丸を伴光我子幸
美丸の首を切て刃代とすとすは美丈夫丸は十
賀のありり伴光りあらうらうらうらと云く
愚考花の賀源氏細流仁明天皇嘉祥二年奥祓
寺大法師を賀天皇備四十乞始と正月より六月
までには生連するもの花の賀を祝ふ七月より
十二月までには生連するもの賀を祝ふ

歌合独古 徳首よあおらうらう

太舟曰井煙抄曰寂蓮顯眼を毎日弄りていと
ういありり顯眼を弄りて獨古を拵り

うら寂蓮を徳首りいげていとこのいさり屋中の
女房例のとりこのうらうらいと名符りり是を
是大お家よ六百番歌合の時の事と

あし秋立の音らうらう

愚考本朝語園よ或序よして頼阿六首の歌を
充て不用音の候小抄のトよ押入て是は是
よあしよあ雲う六首をうらうらうらうらう
是うらうらうらうらうらうらうらうらうらう
又是は悉い前の歌よてをあらうらうらうらう
すりてさうらうらうらうらうらうらうらうら
をえんて皆感しぬと云く是は是は是は是は是
るらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
是るらうらうらうらうらうらうらうらうら
附るは歌を引替て尚感とを心とをのりよ

あつらひれ月るりのとて又一句を吟し味ひて
みえよよくりしきつげえうういすやとハワ
くく古歌よひいすした我名ををるけえれ
のまじさく一ありしと孔子吟わゆるくまの彼神ふ
舟やまの舟てまふきりれあうるまじさくまよ
しきつげえあふいすや喧又囂又嘈ことま
書きて舞の乱まてり形こ神居のめりるまじハ
めはくくくたぬいよりしきんをいりてきつげえ
うりしもの舟あくとを成ふとよりまじさ
舞ことりいふまじるりかまヒスエカラヒスエラ
とまと通きこと才一ふありしきつげハうら
すやまてま一白字えんよくしきつげハうら
まじりともいんくまありるまじ物まじ神居
るまじハうらまじるるまじ語るり

瓢箪の大ききと五石はありの
成美曰庄子よ我種之成而實大五石出ま
利をばあままじりれ見込るり

ゆりまのまじりて一ありふ市人
何れりもままま名利の地

愚考のまじりてあまの瓢を許由り伊よ奪ひ
まじりて眞山よろれまをりて水をとのむを
人のあままじりて瓢を絡りり吞まじりて
木の枝よりけておろくまゆの吹まじりよまの
すりまじりてうらまじりて舟捨りてり又堯帝
の執すりまじりてうらまじりて耳のまじりて
らまじりての隠あるまじりてのまあま名利の
地と三ろよ許由り伊をま守り古詩曰長
安古来名利地空手無金行路難

此言をまう寸許に於朝公の位よの事を疑
舞よ名をきき女をまはして小亦を何れ
た舞の歌よもたつや志の志のたをこし
ふりこしむしをひきよるすよし
是養院を志す人のさしうして公よあり
ありんとしてわつ六の徳余の徳よ
舞臺を舞の舞ののといふり曰
舞を好みよるるといふ別あり

空蟬の離魂の歌此花をよき

成美曰本草細目人參條下よ有人卧則覺方
外者身一振無別但不語蓋人卧則魂歸于
肝此由肝虛邪發魂不歸舎病名離魂
故多いし居きの上略して
あり愚業カケれ病を一人をよけ一人ハ

人兩人ともよ行住一対修よその書信
をよるるありといふ

なるりりりり 金二万兩

一書よ京堂所よ室甫といふの親子れ
るきよをえ陽り二人の男子を勤勞して
家紡家養を賣代り二万兩此金を懐
りて生涯矣者の困窮をよすけ
るり此信もやありむを世時人信よ出
やけとちかして

意味坐曰楚國よ一人の孝子あり或時
ありて母の款を火入るくその罪を悔
て自分と郡主一許一出るりその母れ
やう是を我子よをありと切よ

籟るりしと之附きぬらり

そめいらの不そそ浅黄よ秋のそ連

一書よ蘓迷盧山よ須弥山孔るりるり西城記

曰在大海中提金輪上日月所回追取よ北ハ

黄よ南よまきく赤白西呉藍よそめいらの

山そ連をそめいらの富士と引直しそら

花とそしそらり 子れ 一舞

一書よ子花をりて花より了ら花林の正花

とるそしそらり

儂政をうれしと紙よ色みらり

愚考事物紀原曰法葛亮始製之為神

供又何やらよ塩漬家の傳よ建仁寺の僧

龍山禪師元よ入て林淨因といりりのを

亦よよ寸此淨因より儂政を製す龍山

為朝の竹淨因も末朝し後よ兵を塩漬
と改め南朝よ住居すと云々

西王母 東方朔も自らそそらり

一書よ平家物語よ曰滝口より西王母と

いひし人も昔そそらりて今そそらり 東方朔

とやししものもあそとの并寄て目よあそら

よーや驚 轉の言れみしそらり

愚考曲礼曰驚 驚よりいしそそ花をそそ

るまら 虚よ虚の對るり

ひるるりやりて伊勢の八歌

一書よ後のひるるりよいしそそらり

愚考後のひるるりよ九月朝白く伊勢よ豆雛

といしよの寄りて今そそらりよ見事の歌ひ

と寸古し一歌宮の雛儲八月朝白よ寄といし

従ふ筈を交てその家の子従者なりとて
次才をかちりて喚續してはとわたりし伴
ふ有然といはくも家中独礼懇れとも
にその名をよみはくも愚業花の多ふ
あさけき眩る年既より研はくありきり
筈一きり初めりともあり一尾張喚續
之後呼續よ改め又呼続よ改めり今を宵
月の里といひ祖翁星彦れ得書に宵月ハ
夜明てうらと日よを則是なりと吟海
子代倉某よりそ後玉刻和漢三才景法よ
も見えゆ

かきり〜新酒を人のせぬ安き

杖うそを〜いはくも湯きり

愚考博物志曰人中酒不解治之以湯自漬

則愈湯亦依酒氣味也又葦草紙曰曰誦文
秋二首の夜行の秋司りともやはるせりよ
ふめり酒を酔は酔は多ふいりりは浴
の秋外への後はるせりよふ湯ありと
みくはるすくふいりりものを雲云
う盛さい新酒をせぬ安き連ハ詮る一
扱ふ云は後藤子酒ゆ〜志す〜呑き〜
是より上も〜酔は〜酔は〜
湯よ入りりりきりり林を〜
引りりり〜と一白の十日文字の量
の咄のありり丸巻の及りりりりり
る解りり博識只その依者の量を行
て解す〜才三書を引りりりりり
り〜り形容又ありりりりり

弁面業此字わけふゆく
愚考此病体として世るふ沙汰するを
非るり只能きの酒入酔う一々酒さし
の業をとよりふゆくと弁面の跡袋糸のと
さうさうた実徳をわが色を抄ふ云弁面を脊
面とも弁面とも書て家の後と云又亭主の
挨拶之

疱瘡類の透とゆふたと毒の白き
愚考痘を古より瘡曰聖武天皇天平年
中筑紫此人新羅より渡海して漂泊の折
うらう流り来る時よ泰流和尚法を終し
て漸息災なりと云く此病の甚しき醍醐帝
後光の帝疱瘡して崩御ありとや又麻疹
も万壽二年始てとやるところり詳ふハ懐

妊のりのを治するう何いをんてりて

四月を發するり膏此月々け
志ら此中のむきて後居り女あり

愚考是を胎の侍るりといふとも数多
くして物とも定めりし一嵐雪の函師の
よて死すの姿に侍るゆへ物とも定めら
ぬるり余れ胎の侍るりといふとも定め
とも深代を物侍のせりのるりを何の
侍と皆三白の尻よりしてまらるる
此二白の侍源氏最盛の侍住吉のころ
の中納言継娘の侍大和物侍の武藏侍
るりといふこきりて爰よてまら平生の
るりといふこきりて

宗因やらのるよ人ふ毛り三節をうりて
呼子なる其角うるやらん猿をうりて狙う
て北けよのこる彼是の海皆を差するり

神電やまののの相の本よ
五味堂曰古詩よ曰三寸白雪降指相云く

あららるししき捷り
一書に五名抄曰陸奥守為伴任果てのる
より時を味遊の萩をのりて若捷十二合よ入
持てのちりき連ハ人ありあけはりて系一入
その日る二条大路よ是をえ物して人多
くありまより車るもあらまのこりより
るより押合よ月とりりあは後のをを必
月の人はるしうけりりし
何よりを泣き心繫をとりりおねひ

忘るしりのさいもぬはまこるき

愚者乃大わりのうりよ脱却の何時とこのや
れ息不業の以曹子の茶やりのを物狂く
き女このけありきをを帝あやみと
のめやせまの連とよのよのいよりのま
公忠網片思つらむ心のうらむをなぬと
泣んをよる出そりりりり

柳らら々と 例の 蓮 及

一書よ蓮乃るおの下之尺、通りこ探干のめり
るのりるをよ云又ハ王の湯毒の乃筋よ蓮を
ふ或る布をよと或る友抄をよすら皆蓮を
の傍をよるは守はるる帝下傳ひの蓮をこ
寂しき林を女丈夫 けり
愚考私よ配するを女丈夫と云替を調一蝶

阿のを夫婦とりり

書にこれらうり時あるえすす

一書よりくうり時ある伊賀と河内の場合なり云々
やうきし子や正木を引よ讀くみらむ

一書よりくうり時ある伊賀と河内の場合なり云々
上より目の無りしうりてまよと云はるをむ

本とも秘教の上よりして傳ありのなり 幸子
核之又學子為種本法後あり下略 一書に

是類武村種と書 此系子日本紀私記よ曰福
草和名抄云草枝々相値ある相當也 愚考

やうきし子や正木を引よ讀くみらむ
枝多なきも子に核の流を然らけけ種
先の瓶物の細炭賣の妻や子とも

合て核子や正木の正木を引よゆく情之核や
正木を引よ行とる非なり引とる根あるは
引をくす養るなり

物よりよまうり合てまうりち
捨とり 女中なり

浦津よ腔 吹やうり月録

愚考おのりの情といふは此の只今を
を物のりの情の情と其の人の多味形状

るくは押あてしうり情とをさす
くこのの初をえて情なりしうりのこ流成り

その巻のうち君を移むすしあてお
めらうりしにいと心あまうりし月や
汝のうりし子ちあまうり後なりしうり余波を

よせうり流ありしきをまの戸押あてるなり

おたゞし—あす迎きせういふりの心を志りて—
く—あす迎きせういふりの心を志りて—
さ—あす迎きせういふりの心を志りて—
人おたゞし—あす迎きせういふりの心を志りて—
は—あす迎きせういふりの心を志りて—
月のさ—あす迎きせういふりの心を志りて—
おたゞし—あす迎きせういふりの心を志りて—
て—あす迎きせういふりの心を志りて—
ら—あす迎きせういふりの心を志りて—
あ—あす迎きせういふりの心を志りて—

愚考 和漢三才集 云ふ曰 紀伊の北 魂を
あらし七十三

中村長保寺 天台宗よて 寺於二百之 紀伊
家の書 控とありて 新宣云 此は 魂を ありて
寛文十一年 薨す 南涼院 殿と 号すと云々

善志 此云— 矣 村々 吾 院の 陰

愚考 武用 弁略 小曰 寛文七年 此書 紀伊の
大寺 家伝 五人 小命—て 子 村を なる 云々— 此 所謂
葛西源 五左衛門 葛西 甚太郎 吉田 才
右衛門 甚太郎 各 九分 余れ 通— 矣を 均り
と云々 是 云々— 然り— 大 矣 数— 云々— 小 矣
数— 大 矣 数— 昔 日 の 言 方— 云々— 此 言
言— 終— 尾 陽 是 勢 勤 在 衆— 八 千 筋 村— 云々
云々 傳— 小 曰 是— 則 本 附— 有— 前— 云々— 小
附— 云々— 心— 云々— 云々— 云々— 云々— 云々—

秤よくふんしれ無

愚考秤を斤兩を二寸りのゆへ北越よそを
斤兩とりし又ちきり杜秤略してちきとりし

以有極入るれまのけらるるに

愚考獲衣よ曰入るのまを漢後帝れ姫
まよてはくはれたよ入るをまの漢後よ
うらまをまのちを獲衣の大時より深く
意をいをまのれをひらたのうく
おのちまのて人よまのちまのまを
おのちまのちまのちまのまを
後白よその債をりまのまのまのまの

百七十四



